ないことや、ひろばのほとんどのスペースを利用することから、参加できない会員のひろば利用がしにくい。

「プチ工房」

実施ひろば名
　親子のひろば『まんま』
担当者
　金子、中原、毛利、野中　（ひろば利用者・企画提案者）
波木井美由紀、吉田直美（ひろばスタッフ）
実施日
　10：30～12：00
　月１回（11/11、12/9、1/18）
対象者
　ひろば利用者、予約制だが人数制限なし
内容
　「指編みなんかもやってみたいよね。」「こんな素敵なの本に出てたよ。本見ながら作ってみよう。」「だれか、ビーズできる？」こんな会話がひろばであり、一人で家でやるより、みんなでひろばで楽しく作りたい。ということで、ママ達の手作り製作日を開催。
　材料費は実費
　製作物、講師は毎回話し合いで決定

11/11　ワイヤークラフトで作るクリスマスツリー　参加者７名。材料費￥165
12/9　指編みマフラー　参加者４名。材料費: 毛糸持参のため無し
1/18　リラックスピロー　参加者 5 名。材料費: ￥320
　針を使うことから、子どもの安全に気を配り、針の確認や子どもが近づかない様保育。

実施結果
＊参加者の感想
11 月
・おもしろかった。久しぶりに工作みたいなことをした。子どももみててくれたので、集中できた。
12 月
・今回の指編みは、毛糸さえあればできる手軽さがｇｏｏｄでした。
・コツさえつかんでしまえば、アッという間に編み上がると言う点も子育てママには嬉しい限りでした。子どもとお揃いもいいなー。
１月
・ピローの中身に小豆を使用したが、参加している会員が、なぜ小豆がよいのかについて、効能などを調べてくれたのでよい勉強になった。

評価
・特別に講師をよぶのではなく、お互い教えられるものをみんなに教える。
・参加して、何かを作る喜びだけでなく、教える楽しさも味わっているところが、とても良い。そして会員同士で相互保育もしながら行っている点もすばらしい。作成時間中の、会話で情報交換できたり、学習できたり大変貴重な時間となっている。

④みずべ

親の自主活動

実施プログラム

親たちによる自主活動

実施ひろば名

江東区子ども家庭支援センターみずべ

実施担当者

・センタースタッフ
・みずべ会議参加者
・みずべまつり実行委員
・みずべボランティア
・ケーキサークルメンバー

実施対象者

実行委員等の募集は広く、来所の親たちに呼びかけるが、スタッフが個別に声をかけ、参加してもらうというケースが多い。

実施の方法と内容

江東区東陽子ども家庭支援センターみずべ（以下東陽みずべ）では９９年の開設以来５年の月日が流れてきたが、年を重ねるごとに親たちの自主的な活動が広まってきた。自主的な活動はそれ単体で成り立つものでなく、複数の要素が重なり合い成立していると思われる。ここでは単体のプログラムだけを取り上げるのではなく、自主活動を構成しているものを多面的に表していきたい。

1)みずべ会議

①実施日時、回数　隔月開催

②実施対象者　利用者代表(10 名)、ボランティア代表(2 名)、スタッフ代表(2 名)

③実施の方法と内容

スタッフ、利用者だけでなく、ボランティアも入るという構成によって、センターの運営、活動のプログラム、環境作りやお母さん達の要望、自主サークル活動などについて話し合う。

④実施結果　毎回、活発に意見交流がなされ、“自分達のセンターをもっと素敵な場所に”という気持ちが伝わってくる場になっている。お母さん同士が助け合えるようにと、母の輪タイムやコーヒーママ(先輩お母さんがコーヒーを飲んでいるお母さんの子どもをみるという活動)についても、子育て中のお母さんの視点からの意見が出された。

2)すいすいクラブ(情報誌)

①実施日時、回数

季刊発行　年4回

②実施対象者

お母さんたちの自主的なグループ活動

③実施の方法と内容

自分たちの知りたい情報をアンケートなどで集めて、編集発行している。

④実施結果

引っ越してきた方や初めて子育てをする方々にとって心強い情報が盛りだくさんであると、好評。

—今年度発行の特集テーマ—

春：レッツ！おでかけ

夏：「わたし」のために
秋：ウチの家計簿
冬：行って学んで楽しもう♪

3)ケーキサークル(深川レインボウ)

①実施日時、回数　　毎月1回

②実施対象者
・ケーキサークルメンバー

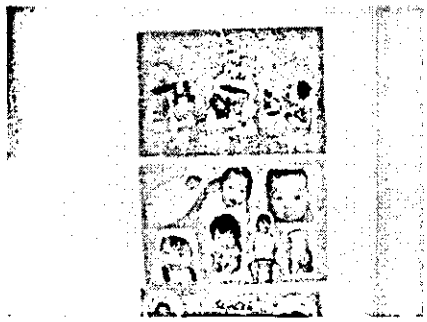
③実施の方法と内容
ケーキ作りの大好きなお母さんたちが集まって、ケーキサークルを開催している。試作、本焼きと準備を進め、喫茶みずべのときには毎回おいしい手作りケーキを作り、販売してくれている。レパートリーも広く、季節に合った、子どもも喜んで食べられるケーキは毎回好評である。
みずべまつりや母の輪タイムの時にも参加し活躍している。

4)みずべまつり

①実施日時、回数　11/6(土)10:30～4:00

②実施対象者
呼びかけに応じた実行委員

③実施の方法と内容
実行委員の呼びかけに他のお母さんも加わりながら、各係ともチームワークよく準備を進める。普段交流のない母親同士の仲間作りのきっかけにもなっている。
＜子どもの絵笑顔写真展＞
台紙を配布し、思い思いのアイデアで子どもの笑顔写真を貼ったものを廊下一面に飾り付ける。毎年参加している子どもは1年ごとの成長振りが楽しめて良い思い出になると好評を得ている。



＜ベビー・マタニティー・リサイクルバザー＞
子供服、子ども用品、おもちゃ、マタニティーなど自分のところでは不要になったものを持ち寄り、分かち合う。このバザーと手づくりケーキ販売の要り上げ金は、毎年世界の子どもたちのために寄付しているが、今年度は10月におこった上信越地震の被災地に全額(71635円)を寄付した。
＜手作りケーキ販売＞
ケーキサークルのお母さんたちが、作って持ち寄ってくれた手作りケーキを販売してくれた。手のこんだ手作りケーキがレシピつきで並んだ。たくさんの人に楽しんでもらいたいと、ひとり4個の限定販売にしたにもかかわらず、15分で売切れてしまうほどの盛況であった。
＜手づくり作品展示＞
お母さん手づくりのウエディングドレス、ベビードレス、甚平、おばあちゃんが丹精込めて作っ

てくれた七五三の晴れ着…家族の人たちの自慢の品が所狭しと並んだ。それらの中央に陣取った子どもたちの手形を配した、大きな木も彩を添えた。

＜健さんコンサート＞

ボランティアの田村健さん率いる「みずべ豪華メンバー」によるお楽しみ音楽会。空き缶を利用した手づくり楽器が子どもたちの興味をそそっていた

＜親子で遊ぼう＞

有志のお母さんお父さんがふれあい遊び、ふれあい体操の時間を開いてくれた。ねずみの着ぐるみを着たお母さんやピングーの親子など、日ごろ見られないひょうきんなお母さんの姿に会場は大いに盛り上がった。

④実施結果

開設三年目からスタートしたみずべまつりだが、毎年利用者の中から実行委員を募り、三年間続いている。みずべの理念である共に創り、共に分かち合い、共に育てるということを、あらわしたおまつりになっていると思われる。参加、参画をするといっても具体的な方法がなく、きっかけを必要としている人が多いのも事実である。実行委員の募集などは、ただ張り紙をするだけでは難しく、スタッフが個々に呼びかけたり、友達どうしでさそいあったりということで集めているが、いずれにしろ日々のひろばの中での関係性がどれだけできているかということがおおきく関わってくる。そうした意味では日常の活動や理念の集大成という意味がこのおまつりにはあるといえる。

5）母の輪 time

①実施日時、回数

5/25 手作りおやつ

6/22 時間の使い方

7/27 手芸　9/28 中国語

10/26 かご作り

1/25 手芸

2/22 手作りおやつ

拡大版　9/16 幼稚園について考えよう

11/10 保育園について考えよう

②実施対象者

参加希望者

③実施の方法と内容

「お母さんにも活躍の場を」という、お母さんの声から始まった。それぞれの趣味や特技を生かし、お母さんが講師となって、他のお母さんに教える講座である。昨年から引き続き行っている[手作りおやつ][中国語講座]のほか、今年度からは[手芸][時間の使い方][かごを編もう]が行われた。手を動かしながらおしゃべ

りをしたり、先輩お母さんの話を聴いたり、楽しい時間をすごしている。今年度は[母の輪 time 拡大版]として、幼稚園・保育園のことを先輩ママがお話する会がもたれた。幼稚園・保育園のことはお母さん方の大きな関心事であり、母の輪タイムの中で行うのがよいのか来どうか課題になった。

④実施結果

みずべの中はめだかクラブというプログラムがあり、そこでは教えあいっこを主とした活動をしていたが、その中心はボランティアであった。この母の輪タイムではお母さん自身にもいろいろな力がありその共有を目指したものだが、こうしたプログラムがあることでスタッフの心構えの中にそうした視点が生まれることも確かである。

つまり日頃から親たち接するときに、なにげない会話からその人の好きなことや得意なことなどを聞いたときに、その人のプラス面として受け止めることが出来るということである。

評価ープログラム実施の意義と課題

今回は五つの自主活動を記録したが、なによりも根底にみずべの理念が通っていることを再確認した。ひろばに通う人々はそれぞれに課題も持ちながら、よい面をもち、力をもっているということ、そうした人への信頼感があるからこその活動だと思える。

実施のポイントはまずなによりその理念をスタッフ一人一人がしっかりと思うこと、そして日常の関わりを大切にするということである。日頃の関係があるからこそ、プログラムにつながることであり、そんプログラムの実施によりまた関係性も深まるというサイクルを目指したい、プログラムがきっかけで参加した人も、そこから日常的なかかわりに発展していく、そんな見通しをもちながら活動をしていくことが大切だと思える。

課題としては活動が不定期になったり、継続性という意味で、次年度に続いていくかということが不安定になりやすい。また自主性とセンターの理念のバランスのとりかた、スタッフの関わり方（どこまで入り込むか）は常に課題となることであろう。

時にはセンターという場を離れ、自主的に巣立っていく時もあり、スタッフもセンター内だけの活動と範囲を狭く考えるのではく、市民の自立した活動という意味もあわせて考えていく必要がある。スタッフは内部のグループワークだけでなく、地域活動や地域の情報に関しても関心と理解をもっていく必要がある。

(4)父親支援プログラム

①び一のび一の「父親座談会」

実施ひろば名
　おやこの広場　び一のび一の
実施担当者名
　原美紀　出井美恵子
プログラム内容
　父親座談会・・男性のための連続講座
実施対象者
　び一のび一の会員の父親７人
　選出方法　応募
実施の方法と内容
(1)父親座談会開催までの流れ
父親座談会に先立ち、ひろばで母親講座が行われました。
①母親講座の設定・開催
2001年５月　び一のび一のの会員(0～3歳児の母親)を対象にした、連続講座開催
講座名「親の心、子どもの気持ち」
　全５回　それぞれの会に小テーマあり
時間　10時30分～12時まで
参加者　７名　講師１名　担当スタッフ２名

2001年７月広報誌より抜粋

連続講座始まりました
「子どもの叱り方について」をテーマに始まった連続講座。まず参加者は○○ちゃんのお母さんではなく、自分の名前で話をしようということで名札を作成しました。(ちなみに臨床心理士の伊志嶺先生は「みーみ」でした。)
　続いて自己紹介。そして夫との育児のバランス、父親、母親としての考え方などを話しました。「多くの父親は仕事に忙しく、休日も疲れがとれない。母親は子育てを一手に引き受け、日々悩んでいる」という今の子育て世代の姿が見えてきました。
　みーみから「ストレスにならない程度に、突破口としてなにか行動を」と宿題が出され、
１回目終了。２回目以降は「自分と夫」「母親と父親」「子どもと母親(父親)」「家族とは」などについて語り合っています。悩みを話し合いね自分の意志で行動してみることで、現状脱出の糸口は見つけられるかもしれません。

○ 母親講座参加者の中から今回の講座をとおして話し合ったり、学んだりした事柄をぜひ父親にも伝えて欲しい、父親にも同じ様な「学び」の場の提供を、という声があがっていました。そのリクエストに答える形での「父親座談会」の開催となりました。

(２)父親座談会の設定・開催
2001年９月　び一のび一の会員(0～3歳児の父親)を対象にした連続講座
講座名「男性のための連続講座」全３回
父親の参加しやすい日を優先・・・いずれも土曜日。また仕事の都合など、どうしても初期設定日での開講が難しい時は参加者の中で日程調節も可能という前提の設定にしました。やはり、参加者の都合で初期設定より最終日は１週後にずれ込みました。父親はどうしても仕事が優先なので、融通がきくように調整していきたいものです。タイトなスケジュール設定は参加者にとっては厳しいと思います。まずそれだけて、退いてしまう人もいると思います。
時間：１１時～１４時・・・昼食をはさむことによって、毎回打ち解けやすい雰囲気を作る。ある程度のリラックスを誘うためのアルコールも可としました。
参加者：７名　講師１名　担当スタッフ２名

2001 年 9 月広報誌より抜粋・父親座談会の案内

男性のための連続講座
びーのびーの連続講座第 2 弾が始まります。4 月から 5 回行った母親向けの連続講座に続き今度は父親、夫である男性のための連続講座を 9 月後半より 3 回行います。

普段はひろばを訪れる機会のないお父さん層ですが、ぜひ最初はお子さんと、希望者には 3 回ともご夫婦で気軽に参加していただきたいと思います。お互いの育児の状況を知ることで、自分の家族の育児を振り返るきっかけができればと思っています。また、家族や仕事先とは別に、子どもを通じて地域で新たに悩みや思いを共有できる場になってほしいと考え企画しました。

日程は下記のとおりです。9 月中旬頃からひろばにて予約をとります。リラックスした雰囲気を大切に講座を進行していきます。ぜひパートナーをお誘いください。

○参加者は常連の会員の夫でしめられていました。しかしながら、妻に進められて、気乗りはしないけれど何となくやってきたという方も。ただ、ひろばのなかに「父親講座」のお知らせを掲示していると「うちのパパは絶対にこないわ・・」という声も何度となく聞きました。「来てくれるだけでも、いいパパよね」という声もありました。そんな中で、第 1 回目の講座がはじまりました。

以下第 1 回参加者の感想。2001 年 11 月広報誌より

普段ひろばを訪れる機会のないお父さん向けの連続講座が始まりました。3 回連続の初回である 9 月 29 日は親子での参加形式でした。まず、午前中は、柴田先生による親子体操。子どもたちは所狭しと走り回って大喜び。少し運動不足気味のお父さんたちは、汗だくで、お疲れ様でした。

そして、ビールで乾杯をした後、昼食をとりながら、自己紹介が始まりました。明るい時間からのビールには、70%の解放感と 30%の後ろめたさ、そして両者の醸成する 300%の爽快感があります。最初はなかなか自分のことを話しにくかったものの、うちとけてくると、自らの子ども時代について語り合うことができました。また、今の子どもたちの育児環境は自分たちの育ってきた環境とは大きく異なることも実感しました。結構深い話ができそうで、これからが楽しみです。(参加会員の K さんより)

第 2 回は「わが子の写真を見ながら、子どもを語ろう」

語れる人、また性格的に控えめな人、参加者様々な取り組みでしたが、ファシリテーターのリードで、それぞれの思いを語る場になりました。

第 3 回は参加者の 1 人に「僕の子育て体験記」を準備してもらって語っていただき、それを話題の切り口としました。「「僕の子育て体験記」を準備してもらった方は、第 1 子が 4 歳、第 2 子が 2 歳で他の参加者よりやや先輩お父さんという存在でした。

D さんの「僕の子育て体験記」

家族の簡単なプロフィール紹介のあと以下の内容にそってトーク。下線の内容が話題提供となり、話が弾みました。

1．第 1 子誕生

1995 年 3 月 13 日。1 月に阪神大震災、1 週間後地下鉄サリン事件がありました。当時の私は入社 5 年目で、ちょうど職場が変わったばかりで忙しかった時期でもありました。

2．最初の失敗（反省）2 つ

① <u>立会い出産をしませんでした。</u>（今も言われます・苦笑・ごめんなさい）

②生まれて１ヶ月目くらいで 10 日間海外出張になりました。妻の実家が総出で支えてくれました。(今も感謝しています)
立会い出産については、参加者各自エピソードあり。

３．０歳～２歳前半

①日記を読み返すと、お風呂に入れたりしたのがトピックになっています。トピックになっている内はだめで、当たり前の状況にならないといけなかったようです。自分ではやった気になっていても、実際はあまり妻の力になっていなかったようです。

②仕事の状況も他社に出向したり、かなりハードな状況になっており、帰りも遅く（今も遅い？）、夜に龍之介が発熱した際に、連絡がとれずに大顰蹙を買ったりしました。

③妻も自分の時間が持てずにいらいらがつのっていました。育児サークルで大豆生田夫妻と知り合ったのもこの頃で、精神的に随分ささえられたようです。0～2 歳くらいまでの間は、男性は頭を使う前に、早く帰って、ひたすら体を使う（労働力を提供する）のが１番な気がします。また、よく育児ノイローゼとかを聞きますが、会社員は何やかや言っても、いろいろストレス解消があります。奥さんにはあまりないため、自分の時間を作ってあげるのが大事みたいです。そんなこともあり、2 歳後半の頃から、新羽のガストのそばの公園（通称ジャボジャボ池）に夏の間の週末、半日くらい二人で行って水遊びしたりしました。(お勧めです)
具体性のある、身近な話題(特に失敗談など)は参加者の興味をひくようです。他の参加者も自分自身の体験・・失敗談など・・を話してくださいました。妻にしかられた話で「誰も完璧ではない」と思って警戒心が払拭できたのか、参加者の緊張もじょじょにほぐれていったようです。男性の私生活へのガードは、女性では考えられないほど固いと思いました。

４．２歳後半から３歳前半

①だんだん言葉が豊富になり、今までとはちょっと違うステージになった感じがしました。散歩や家にいる時に、いろいろと質問をするようになり、自分の言いたいことができてきたようでした。

②ちょうど、平成の新しいウルトラマン（色が青かったりした）が始まった頃で、一緒に見たりし始めました。自分もウルトラマンを昔良く見ていたので、話をするきっかけになりました。(おもちゃも随分買ってしまいました)

③二人ではじめて遠出をしたのもこの頃です。円谷プロ主催のウルトラの旅というバスツアーで、箱根に行きました。調子に乗って２回目のマザー牧場ツアーにも行ってしまいました。帰りのバスでビニール袋におしっこをさせたり、結構ひやひやしました。(おかげでウルトラマンのサインが一杯あります)

④自我が強くなってくると、拡散性の強い子供だということがわかって来ました。だんだん今までとは違ういらいらも感じ始めました。おとなしくしなかったり、おもちゃを大事にしなかったりで、ついつい叩いてしまったのもこの頃です。初めて叩いたときにおしっこを漏らしてしまいました。今も後悔しています。いろいろ自己主張したりしてくるのですが、その分いらいらもさせられました。今思えば、当たり前のことですが、子供と大人の判断の軸が全然違うことをついつい忘れがちだった気がします。大人は良い・悪いとか、適・不適とか、正否で判断しますが、子どもは（特にうちの子は）好き・嫌いとか快・不快でものごとを考えますので、そこをもう少し理解してあげればよかったと今は思います。おもちゃも、質のいいものをとか考えるのですが、うちの子はまず質よりも量みたいです。しかしながら、あまり子どもの目の高さにたってしまうと、特に龍之介は図

に乗りがちですので、そのあたりの加減が難しいですね。
おもちゃのところで、自分の小さいころの話題が出て盛り上がりました。
二人だけの遠出や、叩いてしまったときのエピソードは先輩お父さんならではの話題で、これからの自分と子ども重ねている人もいました。

5．3歳前半～現在

①幼稚園の入園に際しては、休暇を取って一緒にいくつか園を回りました。いろいろ見ると、ひとつひとつ全然違うことが判って勉強になりました。大豆生田夫妻にもずいぶんご助言をいただきましたが、結局夫婦の原風景にあるイメージの幼稚園に近かったので、港北幼稚園という都筑の園に決めました。玲緒奈が生まれたのがこの頃です。

②幼稚園入園とともに、都筑のニュータウンに引越をしました。大倉山と違い、遊歩道や公園が多く、自然もあって（ざりがにもとり放題)、友達も出来てきたことから、あまり親べったりでなくなりました。小学生入学に際して、再び港北区に戻って来ましたが、他では得がたい環境であったと改めて感じています。

③幸いなことに幼稚園もあまり悩むことなく打ち解けたらしく、楽しんで通っていました。親にべったりでなくなったので、少し、気も楽になったのですが、新しい悩みも生まれました。龍之介はどちらかと言うと周囲が幸せであると、自分も幸せに感じる受容性の高い子どもだったので、友達との関係でいろいろと事件もありました。本人もつらい部分もあったと思います。他者との関係で問題が起きたときに、父親として公平性を優先するのか、自分の子どもを優先するのか悩みました。

幼稚園に入ると、父親が活躍する機会も多くなりました（港北幼稚園は父親参加の行事も多く、幼稚園選びの基準のひとつに考えてみるのも面白いかもしれません)。他の子どもの父親と並ぶと自分の親についても、いろいろと違った感想を持つようです。今後は小学校ということで、再び未体験ゾーンで、あり程度手探りでやっていくしかないと思いますが、少しでも今までの体験が活かせればと思っます。　　終わり

先輩お父さんとして、より具体的な話が出てきて、「子どもに与えたい環境とは？」「どんな子に育てていきたいのか」「子どもがお父さんを意識し始める時」など、参加者の０～３歳児の父親がこれから出会っていくであろう様々な事についての投げかけになりました。

参加者はこの体験記をとおして子育てについて具体的にいろいろと考えるところがあったようです。

6．実施結果・・父親の座談会が生み出したもの

3回の講座でしたが、「父親の子育て」についての話し合いをとおして、ひろばに来る子どもの「父親」の出会いの場となりました。参加者の中の２名と講師が中心になって 2002 年父親サークル「劇団　パパびーの」の立ち上げに至りました。びーのびーの会員の父親によって構成され、継続的な活動をつづけています。原則として、活動は「びーのびーの」で「子どもを連れて」。父親自身が楽しめる活動であるとともに、活動の時間で母親がリフレッシュできる役割も果たしています。また劇団活動という実際のワークの中での交流はより深い関係作りを生み出すものとなっているようです。

子ども同士はお互いひろばを通じて仲良くなっているので、おもに土、日曜日、ひろばの休日に行われる「劇団　パパびーの」の活動を通常のひろばとは違った感覚で楽しみにしています。

「劇団　パパびーの」は、現在ではびーのびーの内にとどまらず、地域の親子に対しても発表する機会に恵まれ、活動の場を広げていきつつあります。

2003 年度　劇団パパびーの活動報告(NPO 法人びーのびーの　総会資料より)
今年度は 3 回の公演を行った。今年は、びーのびーの内だけではなく、地域の子どもの場にも出向いていって、活動を行うことができた。新しい作品はできなかったものの、「3びきのがらがらどん」の脚本を大胆にもアレンジした。また、「パパびーの」のテーマソングも作詞・作曲し、好評であった。次年度こそは、新作に取り組みたいと考えている。
10 月 18 日（土）　菊名西口商店街のイベント（ふれあい・にぎわい・秋祭り）
12 月 20 日（土）　お話キャラバン（港北図書館にて）
1 月 24 日（土）　菊名コミュニティハウス・お話会

2004 年度　劇団パパびーの活動報告(NPO 法人びーのびーの　総会資料より)
今年度は 1 回の公演を行った。今年はメンバーの転出あり、また新メンバーの加入ありと、結成時からのメンバーの多少の入れ替わりがあった。新作「おおきなかぶ」に取り組み、びーのびーののクリスマス会で披露し好評を得ることができた。昨年度 2 回行った、「地域に子どもの場に出向く」ことが今年度はできなかったのが残念。次年度は、新作に取り組むとともに、びーのびーの、また地域でも活発な活動をしたいと思っている。

7．評価・・今後の父親座談会

父親が子育てを意識的に話す場としての「父親座談会」は続けていきたいプログラムの一つですが、最近は父親の育児参加を「劇団　パパびーの」の活動に一任する形となっているのが現状です。父親の座談会が開きにくい理由はいくつかあげられますが、まず続く不況下で父親の勤務体制がますますハードになっていること。父親の休日もままならない家庭も存在します。父親にとって育児を楽しむどころではない時間的にも極めて厳しい社会状況が座談会への呼びかけのチャンスを阻んでいるように思えます。また、びーのびーのの当事者スタッフに父親座談会の参加を呼びかけると、以下のような答えが返ってきました。
「うちはロベタで人前には仕事以外出ないタイプなのです。育児にはわりと協力的なのですが、人間嫌いというやつで」
「主人はあまり子育てについて熱く語るタイプではないので」
「父ちゃんに《行きなさい！》とはいう・・けれど父ちゃんは行かないだろう」
「残念ながらうちはノーです。興味がないとかではなく、仕事以外はそういう場が苦手みたいです」
「夫は、人見知りなので、ありえないと思う・・おそれおおくていえない」など。
父親にも育児についての相互の学びあいの場が必要とされている今日でも、スタッフの寄せた言葉は、一般社会ではやはり「子育ては母親の手」でという概念がまだまだ生きていることを如実に物語っているように思えます。

核家族の夫婦が本当の意味で子育てを楽しめるようになるためには、個人単位のいわゆる「夫婦の努力」が必要なのか、それとも、社会の改革ありきで、子育てに対する社会の意識が大きく変わらないと実現しないもの、果たしてどちらなのでしょうか。

②わははネット
「日曜！パパのための子育てひろば」

実施ひろば名

わはは・ひろば坂出

（主催：わはは・ひろばに遊び来るお父さん・協力：NPO 法人わははネット）

3　実施日時

１２月３０日(日)　10：00～12：00

回数　　：　１回

実施場所　　：　わはは・ひろば坂出、オアシス元町（ひろばから 100m西）

プログラム　：

【わはは・ひろば坂出内】

時　間	内　　容
10：00～10：10	主催者あいさつ（わははひろばに遊びに来るお父さん）
10：10～10：30	お父さんと遊ぼう（親子でふれあい運動遊び）
10：30～10：50	お父さんの手作りおもちゃの紹介（自己紹介を兼ねて）
10：50～11：50	お父さんたち交流会
11：50～12：00	お片づけ、スタッフによるペープサート、さよならの歌

【オアシス元町】

10：00～12：00	母親だけが集まり交流会

4　交流会実施対象者

4．1　交流会実施対象者特性

【わはは・ひろば坂出】香川県内において０～３歳児を育児中の父親とその子ども

【オアシス元町】香川県内において０～３歳児を育児中の母親

4．2　人数

【わはは・ひろば坂出】父親６名、子ども９名

【オアシス元町】母親４名

4．3　募集方法

- ひろばの掲示板やチラシを使って、ひろば利用者・子育て支援センターに広報
- 新聞を通しての告知･･･四国新聞･オアシス･朝日新聞･読売新聞
- 地元ケーブルテレビにおける告知･･･香川テレビ放送網
- わははメールでの告知･･･「わははメール」とは妊婦や未就学児を子育て中の保護者に対して香川のイベント情報･子育て情報を携帯メールに配信する独自システムであり、その中で特別イベント実施のメール配信を実施。　（現在２,０００名登録）

5　実施担当者（かかわった担当者全員の名前とその立場・役割）

【パパのための子育てひろば担当者】

受付	星原徹　・　山本知子	父親交流会進行	星原徹
親子体操	山本知子		

【母親交流会担当者】

母親交流会進行	村上真紀

6　実施の方法と内容

6．1　実施の目的

男性は女性と比較して、育児や家事にかかわる機会が持ちにくく、主体的なかかわりが持ちにくい実態がある。父親が子どもと共に体験活動に参加することを通して、子育ての喜びを体験し、子育ての主体者としての意識を育てたい。

また、父親が子どもと共に遊びに来ても、母親に比べ人数も少ないため、他の父親と出会う機会がなく知り合いになる機会もない。子育て中の父親同士が知り合う場を提供することで、父親同士がつながり、家族や地域の中で主体者としての父親役割への意識を高めてほしい。さらに継続的活動ができるよう働きかける。

6．2　実施の内容

6組の父子から申込みがあり、4人の母親が参加。父親は「わははひろば坂出」にて交流会を実施し、母親は「オアシス元町」（わははひろばより100m西側）にて交流会を実施。

6．2．1　日曜ひろば実施の方法

- 受付をすませたあと、父子で名札を付け、他の参加者から名前がわかるようにする。
- イントロダクションとして、父子でできる簡単な手遊びや親子体操を実施。
- 参加者はひろば利用者本人（育児休暇中の父親）とひろば利用者（母親）の配偶者が多数であったため、事前に手作りおもちゃを得意とする父親に声をかけ、おもちゃを持ち寄ってもらった。
- 手作りおもちゃを持参した父親にそれぞれ自己紹介を兼ねて、おもちゃの説明をしてもらった。
- その後、おもちゃの紹介をした父親以外の人が自己紹介
- 現在育児休暇中でひろばを週に1～2回利用する父親を中心に、子どもをひろばで遊ばせながら交流会を開始
- みんなで片付けをし、ひろばスタッフによるペープサートを実施
  （まんまるちゃん・しかくちゃん）
- さようならの手遊び歌
- アンケート実施

6．2．2　日曜ひろばの内容

●全体の進行はわははひろばスタッフが行い、交流会はひろば利用者の父親が行った。

プログラム	内　　容
手遊び・親子体操	●「ぼんぼんおはようの歌」。 ●「グーチョキパー」など簡単な手遊び。 ●「ぞうきん」や「がたがたバス」など少し身体を動かした遊び。 ●「お父さんの肩までのぼって」や「のぼってくるりん」「飛行機からバク転」など、力を使ったお父さんならではの体操。
手作りおもちゃの紹介	●木のぬくもりを大事にして、木製の携帯ストラップ （子どもが退屈になったとき、いつでも携帯ストラップで遊ばせることができる。） ●動物の形の木製パーツに穴を開け、ひもを通したもの。 （小さなときから・少し大きくなってもいろいろな遊び方ができる。） ●同じ素材を使い、おしゃぶりホルダー
	 ●子どもでも持ち運びのできる重さで、落としても安全なダンボールを使用。 ●上からボールを転がすとしたにだんだんと落ちていく、木製のものは市販であるが、手作りの温かみが感じられる。小さな子は音にも敏感なので、途中途中に鈴をぶら下げ、ボールが通ると音がなる。 ●少し大きなお姉ちゃんのために、ダンボールで作成した迷路。（ボールを転がしながら「スタート」から「ゴール」に向かって転がす。
交　流　会	●「土日（仕事休みの日）はどうしていますか？」 →「休みとは言っても、仕事があったり、他の活動をしていたりするから、実際はあまり子どもの世話ができてない」 →「父親と子どもだけでででかけることはほとんどない」 →「父子ででかけることはないが、家族では瀬戸大橋記念公園などに行く」 ●「育児休暇を取りやすい職場なのですか」 →「人が少ない職場ですから、そうでもありませんでした。だから、子どもがうまれた頃に、『育児休暇取るかもしれない』ことを伝え、そうなった時の体制(人員・担当）の確保をお願いしておきました」

	●「子どもと遊ぶならどこへ連れて行っていますか」 →「サティとか」 →「丸亀競艇に仕事で行ったとき、無料で子どもを遊ばせる遊具があって、結構良さそうだった」 →「無理のない参加」「子どもの意向を尊重することが必要」 ●育児休暇中のお父さんが育休を取って感じたこと →「これまで、働いていた時のことを反省した。家で帰りを待つ身になって気づいたが、夕方帰ってきてくれるのが待ち遠しい。帰る時間が連絡なく遅れたり、連絡が直前になったりすると、がっかりするし、食事もできたての温かいものをと思っているのに困る。これって、働いていたときの自分のことなので、悪かったなあと今になって思う」 →「働いているときも、育児をきちんととは言わないけど、果たしている気になっていた。朝一番か二番の電車で出て、子どもを風呂に入れる時間(21 時か半くらい)までに帰ってくる、子どもの面倒を見るようにしていたけど、やっぱり、妻の手伝いっていう意識があった。つまり、最終的に責任を負わない、気付いたらやるみたいな感じ」 →「苦手な食事の苦労話など。」 ●「ひろばへはよく来るのですか」 →「支援センターにも定期的に顔を出すようにしているので、ここは週1・2回です」(育児休暇中の父親)

7　実施結果（対象となった利用者の声や感想。実施スタッフの感想について記録する。）

7．1　交流会実施後参加者アンケート（自由筆記）

7．1．1　日曜パパのひろばへ参加した感想

●一回目では、そんなに深い話はできないですね。まずは顔見知りになれたかなといったところでした。

●子どもとのふれあい方が分かってよかった。普段とは違うふれあい方ができた。

●普段社会人と言ってえらそうにしているけれど、いつも会話をするのは仕事関係の決まった人とだけだが、こういった集まりがあるといろいろな職業の人と会話することができ、視野が広まって良かった。

●仕事でも、趣味仲間でもない人と集まり、初対面で会話をするのは大変ですね。
　母親の苦労が分かりました。子育てについて話し合うのは難しいですね。

●子どもとどうやって遊んで、運動させると良いか参考になりました。

●子どもも楽しそうにしていて、とても良かったと思います。

●いろいろなお父さんの考え方や子育ての仕方について見せていただいたり、聞かせていただいたりして、参考になりました。

7．1．2来月からの活動に対しての意見（自由筆記）

●家族での参加できる、戸外でのイベントがあったら参加したいです。

●おすすめ遊びの紹介。各家庭での面白い遊びがあったら紹介しあう。
●今日みたいな形で良いと思う。何度か開催し、参加することで皆なれて良くなると思う。
●母親が行きやすい施設は多いが、父親が子連れで行きやすい場が少ない。
日曜日にひろばが開館されるのは良い。
●子どもとどう接したら良いか分からない父親のための遊び・イベント
（工作・運動・ゲームなどのイベントがあると良い）
●子どもを飽きさせずに遊ぶのは大変だが、日曜日にひろばを開館するだけでも良い。

7．2　実施スタッフの感想

●女性のひろばスタッフがいろいろと仕切ってくれたため、何とか開催できた。
自分の子どもをみながら、主催者になりイベントを進行するのは大変だった。
難しさを痛感じた。
●父親達が自分の手作りおもちゃの説明をしているとき、子ども達と遊んでいるときの良い表情が印象的だった。本当に良い笑顔があふれていた。
●母親とひろばでいるときの顔と父親といるときの顔が違うように思った。
母親の役割とは異なった、父親の役割があるような気がした。

8　評価ープログラム実施の意義と課題

8．1　プログラム実施の意義

男性は女性と比較して、育児や家事にかかわる機会が持ちにくく、主体的なかかわりを持ちにくい実態がある。また、現代の親世代は育児体験、遊び体験、日常的な生活体験が欠如しているといわれる中、父親が子育てにかかわるためのきっかけとなるプログラムを提供する意義は非常に大きい。

日曜日にひろばを開館することで、父親達が集まりやすい環境を作り、地域ネットワークを広げる契機となる。参加した父子の多くが喜んでくれたことを嬉しく思う。

8．2　課題（プログラム実施にあたっての問題点や改良点）

●初対面の父親が会話をするのは難しい。何度が顔をあわせ、面識ができてくると会話にも幅が広まる。今後も月に一度の活動を継続して行きたい。
●今回はパパのためのひろばと限定してしまったため、進んで参加というより、母親に勧められ参加した人が多かった。家族で(もちろん母子だけでも、父子だけでも)参加できる形にすると、ひろばに入りやすくなり、父親もひろばに入りやすくなる。今後はパパのためのひろばと限定することなく、日曜ひろばとして開放していきたい。
●今回はひろばの女性スタッフが主にプログラムを考えたため、父親の達成感などが得られなかった。今後は特技を持つ父親に主導権を握ってもらい、プログラムやイベントを実行できるように移行していきたい。

(5)学生の子育て支援プログラム

①びーのびーの
「学生による家庭育児支援地域ネットワークモデル事業」

実施ひろば名
　おやこの広場びーのびーの

実施担当者名
　奥山千鶴子、原　美紀、出井美恵子、岩崎久美子、早川志保、畑中祐美子、戸松綾子

実施日時、回数、場所
　７月下旬から９月上旬まで（主に大学生の夏休み期間中）
１人ないしは２人の学生が同じ家庭に５回以上訪問することが基本。
ひろばの会員の家庭

実施対象者
　家庭側２９家庭　学生側４２名
　選出方法について：家庭は主にひろばの利用者が対象でその中で希望者を募った。学生はひろばにボランティアで入っている学生及び本事業に関心を示した学生

実施の方法と概要
　欧米に比べて日本の子どもたち（大学生も含む）は乳幼児に触れる機会が圧倒的に少なく、親になるまで赤ちゃんを抱いたことがないという例も最近では多くなってきている。
①事前調査
　本事業の実施にあたり、事前調査として地域に根付きながら子どもたちに乳幼児と触れ合う機会を与えている先行事例をピックアップし、以下の４団体を調査対象とした。
・京都文教大学の「助け合いの子育てネット」→３歳未満の乳幼児を抱える家庭に青年期サポーターが育児のお手伝いに入る。
・沼津市片浜中学校のベビーシッターボランティア→中学生が週一回未就学児のいる家庭に２時間ベビーシッターに行く。
・広島子ども劇場広島県センターの託児ボランティア→養成講座を終了した１０代の保育ボランティアが未就学児を親が講演会や劇鑑賞の間預かる。
・宮崎子ども文化センターのまちかどキッズルーム→養成講座を終了した１０代のボランティアが商店街の中にある「まちかどキッズルーム」で未就学児を預かる。

②家庭・学生のマッチング
　本事業の実施の方法としてはまず事業に参加予定の家庭、学生双方の希望調査を書面にて行い、そのデータを下にマッチングを行った。

③ガイダンス
　７月上旬には資料、ビデオ等を基に事業の概要説明を行うガイダンスが開催され、その場で顔合わせも行った。又、交流を深めるため、一緒にゲームなどもした。

④家庭訪問ボランティア活動の実施
活動開始後は大学生１人ないしは２人を受け入れを希望する家庭を訪問し、保護者のいるもとで乳幼児の遊び相手、日常的な育児の手伝いを行った。
又、双方の合意があれば家事を手伝ったり、短時間子どもを預かる活動も行った。
訪問回数　５回以上
活動時間　１回２時間以上（ただし１日５時間以上は２回と数える。）
各回活動後には家庭側、学生側ともに担当者への簡単な報告を義務付けた。(連絡方法は電話、メール等)
それにより、活動の進捗状況の把握、問題がある場合には担当者間で直ちに検討し、円滑な活動が行われるよう配慮した。

⑤実施結果

＊アンケートの集計結果

２９家庭、全学生４２人、のべ活動総時間　７８０時間２５分

（１家庭あたりの活動総時間、約２７時間･学生１人当たり活動総時間､約１８．５時間）

６割の家庭で学生だけで子どもと過ごした時間を持った。(平均時間３０分)

家の外で子どもと学生だけで過ごしたのは４割。

また、家事を学生にやってもらった家庭は全体の４分の１にとどまった。(ほとんどが食事の支度や後片付けの手伝い)

･家の外での活動の主なもの→公園遊び、近所へ一緒に買い物、幼稚園のお迎えなど

・家の中での活動の主なもの→ごっこ遊びや、ボードゲーム、料理作りなど

・その他の活動→学生と家庭で外出したケース（こどもの城、通院や乳幼児健診への同行。）

＊学生の様子

ガイダンスの際には不安でいっぱいだった学生も、活動が始まると子どもにわがままを言われるほどその家庭と子どもたちに慣れ、今度はどうやって叱ったらよいかという悩みに変化していった。

訪問した家庭の母親との関係としては子どものちょっとした成長を一緒に共感できたのがうれしかったようだ。

ほとんどの学生が活動終了時には子どもに泣かれ、うれしいような、寂しいような気持ちを味わった。

＊受け入れ家庭の様子

活動前に関係作りがあまりできなかったため、初回はほとんど関係作りから始めた家庭が多いように見受けられた。又そのため、子どもの預かりも学生が不安に感じないよう配慮したり、慣れてきた3 回目ぐらいにやっと預けられたという家庭もあった。

きょうだい児のいる家庭では、普段は下の子の世話で親が忙しく、上の子とあまり遊んであげることができないが、学生が来て上の子ととことん遊んであげたことで、子どもも親も救われたという家庭がかなりあった。

また、子どもを連れて行くのが大変な通院に同行してもらったり、下の子の通院の際、上の子を預かってもらったという家庭もあった。

＊預かりについて

受け入れ家庭の７割がひろばの常連で学生に慣れていることもあり、預かりに関してはかなりのニーズがあることが予想されたが、預かりを希望した家庭は６割であり、残りの家庭は全く預かりを希望しなかった。結果としては平均の預かり時間は３０分以内だった。学生側は預かりを頼まれることが信頼されているということを実感する瞬間だったようだ。

＊家事について

今回学生、家庭双方の合意があれば家事を行うことも可能であったが、家事を希望した家庭は全体の４分の１にとどまった。このことから、家庭側には､『とにかく学生には子どもととことん遊んで欲しい』という希望がうかがえる。

＊学生の活動終了後の意識（アンケート結果から）

活動前の不安や心配事については６５％が気にならなかった、最後まで不安が解消しなかったという回答については０％となっている。

また、活動前に期待していたこと、楽しみしていたことはできたか？という質問については、できた→６９％あまりできなかった＋全然できなかった→１９％

自分が思っていた乳幼児のいる家庭のイメージはどうだったか？という質問については、大体同じだったが４１％、少し違っていた＋全然違っていたのはあわせて４２％となった。

学生の感想

＊子どもとの関係

・最初は正直かなり手間取ったが、だんだんなじんでくれたのでうれしかった。

・子どもは母親がいないところだととても甘えてくるものだと思った。

・子どもが普段できることも、自分がいるときは甘えてやってもらうのが困った。
・子どもが保護者のいないところではしっかりしていたところに驚いた。
・母親が歯医者のときに見ていたが、泣かなかったので安心した。
・２人を同時に見たため、注意力がかなり必要でかなり疲れた。
・年齢の違うきょうだい児を同時に見るのは初めてだったので難しかった。
・１人で訪問することにより、全身で子どもと向き合えた。
・活動終了のとき子どもが泣いて訴えるので、うれしいような、痛いような気分がした。

＊保護者との関係

①預かり

・預かりのときは安全に関しての責任の重さに緊張感があった。
・預かりがかなり多かったので、やるからには責任を果たさなくてはと思った。
・子どもを預かったが、安心して任されている感じがして自信につながった。
・親がだんだん任せてくれる部分が多くなり、うれしかった。
・３０分ほど預かる機会があり、保護者に信用されたと実感できうれしかった。

②保護者とのコミュニケーション

・保護者とのコミュニケーションが課題だった。保護者の前だと緊張する。
・保護者が子育てに対する思いを正直に話してくれた。
・母親の生の声を聞くことができ、保育のアルバイトでは学べないものを学んだ。
・１人の子とじっくり関るのは大変だったが、子どもの成長の喜びを親と分かち合えた
・学生の立場をよくわかってくれている保護者だった。
・ミルク、離乳食など経験させてもらった。自分が子育て支援しないで、子育て体験させてもらった感じ。

③その他

・できれば家事などもっと手伝ってみたかった。
・ひとつの家庭に入って子育てをサポートするということは学校の授業ではできない。

＊子育て全体の社会的環境について

・活動の中で妊婦への配慮、ベビーカーでの歩道の段差、道幅などバリアフリーについて考えさせられた。
・子どもにとっては公園は元気に動ける場所なので少ないのは困る。
・子育ては母親１人でできるものではないと実感した。

＊事務局運営について

①活動時間・期間

・長期にわたっての活動を望む、今回だけでなく遊びに行かせてもらいたいなど。
・泊り込むぐらいの感じで家庭に入ることができたら、もっといろいろ活動できる。
・活動時間、期間にはあまり制限をつけない方がよい。

②学生と保護者、事務局との関係について。

・活動前に両者が深い関係作りができる工夫が必要。
・１日の報告メールにびーのから返信がきて安心できた。

＊その他

・説明会のときと家庭のイメージが違ったが、ここのご家庭でよかったと思った。
・活動が無事終わり本当によかった。
・いい経験をさせてもらった。　深い絆ができた気がする。
・温かい家庭だった

⑥評価

本事業の目的は第１にこれから家庭を築くであろう世代に対して現在子育てをしている家庭の実態、日常に触れてもらうことで将来に対するイメージをより具体的に描ける貴重な体験をしてもらうこと。

第２に受け入れる家庭側も自分達の日常の生活に第３者の目と手が入ることにより、子育ての密室感、閉塞感を拭い、信頼を寄せることができる相手として共助の関係ができること。

第３には地縁、血縁に基づかないこうした新たな関係性が地域ネットワーク作りに関与し、子育ての社会化への重要な一端を担うべきモデル的機能となりえないか、それらの可能性を探ることにある。

まず第一の目的に関しては、５回以上というある一定の期間同じ家庭を訪問するということで、ある程度は達成できたと思われる。

訪問前は不安だったり、心配だったことも、活動終了時には解消されていたということからも、回数を重ねていくことで家庭に慣れていった様子がうかがえる。将来的なイメージについては具体的なデータはないが、保育を学んでいる学生などには実習などでは学べない家庭に入り込んでの実体験をすることで家庭への漠然としたイメージが具体的になり、新たな学びになった。子育て支援への認識を新たに持ったとの声が多数寄せられている。

第二の目的に関しては、具体的な例をあげると、きょうだい児のいる家庭ではどうしても下の子中心の生活になりがちで、上の子は我慢させることが多いが、普段してあげられない遊びをしてもらったり、外に連れ出してもらうことにより上の子にいつも悪いと思っている母も上の子も学生が行ったことで満足できたという例や短い活動期間ではあったがその間の子どものちょっとした成長などを共に喜び合えたという学生からの感想などがあったことからも、かなり達成できているといってよいと思われる。

第三の目的に関しては、まだ２回目のモデルケースのため、地域に浸透するには時間がかかることが予測されるが、今後継続していく中で自分たちだけが必ずしも子育ての責任を負わなくてよいのだという安心感を家庭に与えていき、それを地域に広げていくことで事業の存在を広く知ってもらい、子育ての社会化につなげていくことは将来的には充分可能であると思われる。

又別の角度からになるが、妊婦や赤ちゃんを含むきょうだい児のいる家庭で活動した学生からは街のバリアフリーについて初めて考えさせられたという感想があり、活動を通して子育てをとりまく地域的、社会的問題にも学生が気付いた瞬間だったと思われる。

反省・課題としては、２点である。

1　交通費の学生側負担

金額の一部は主催側で支給できたが、全額とはならず、一部、参加した学生に負担を強いる結果となってしまった。

2　活動終了後の家庭と学生の関係性への支援体制

期間終了後の継続へのフォロー体制もまだできていないので、今後改善がもとめられる。

これらの案件が一つ一つ回を重ねるごとにクリアになっていけば、よりよい活動への道筋となるであろう。

まだ事例の少ない大学生が家庭に赴き育児支援を行うというこの事業だが、他人の家庭を知らない、子どもにほとんど接したことのない次代の親たちへ子どもを持つことの具体的なイメージを喚起したことだけをとってもその意味は重要であり、本事業の継続が望まれると思われるし、当団体としても益々力を入れていく事業の一つなのは間違いない。

②みずべ　赤ちゃんプログラム
「赤ちゃんとのふれあいプログラム」

実施ひろば
江東区子ども家庭支援センター「みずべ」

子育て力は、その人の子ども時代からの体験や学習の積み重ねによって、身につくものであることは、昨今広く知られるようになったが、少子化・核家族化に加え、地域の子ども集団等も失われている現代社会では、自分が子どもを生んで初めて赤ちゃんに触れるという親たちが増えている。そのため、泣いたり機嫌が悪い赤ちゃんにどう接したらいいのか、赤ちゃんとどうやって遊べばいいのかがわからず、不安を抱えてしまう。

将来、親になる若者や子どもたちが、赤ちゃんと直接触れあう体験の場をつくることは、赤ちゃんの心と体の成長を理解するだけでなく、自分自身の親子関係を振り返る機会となり、次世代の親を支援するという視点で、とても重要であると考えている。

目的

赤ちゃんの成長過程や、親子関係にじかに触れ、主体的な学びを通して生命への慈しみ、共感性、養育性を育む。

枠組み

①同じ赤ちゃんを継続観察し、成長過程を確認できるようにする。
②同じ赤ちゃん、同じ仲間の中で交流し、深い人間関係を体験できるようにする。

キーポイント

①赤ちゃんの気持ち・参加生徒の気持ちに焦点をあてる。
②育ちゆく生命の大切さを学ぶ。
③愛情ある親と子の関係を学ぶ。
④成長モデルとしての父親像をそだてる。
⑤参加生徒の「なぜ？」をファシリテートする。

プログラム

第１回　オリエンテーション「はじめまして赤ちゃん」　　４ヶ月の赤ちゃん
・赤ちゃんについての事前学習：「安全・安心・愛されている」赤ちゃん時代の意味
・脳と心の発達
・赤ちゃんに出会った時の気持ちに注目し、仲間と共有する
・赤ちゃんのサインに親がどう応えるかを観る・感じる・理解する
・赤ちゃんの能力（見る・聞く・感じるなど）
・感情や気持ちの表し方（表情や体全体の動き）

第２回　「赤ちゃんは、なぜ泣くの？」　５ヶ月の赤ちゃん
・前回の赤ちゃんとの違いをよく観る
・赤ちゃんの「泣く」表現を通して、自分や他の人の感情を理解する
・泣いた時の親の気持ちと対応を聞く
・怒り・喜び・悲しみ・恐れなどの赤ちゃん
・赤ちゃんのコミュニケーション手段としての「泣くこと」

第３回　「赤ちゃんは、なぜ遊ぶの？」　６ヶ月の赤ちゃん
・前回からの赤ちゃんの成長・変化をよく観る・感じる・理解する
・遊びを通して発達する心や体について理解する
・動きまわる姿やおもちゃで遊ぶ様子を観察する
・外界への旺盛な好奇心を発揮する赤ちゃんのようすを観る
・赤ちゃんと遊ぶ
・日常の様子や、子育てを通しての親の気持ちとその変化について聞く

第４回「大きくなったね」　７ヶ月の赤ちゃん
・赤ちゃんの成長を振り返る
・赤ちゃんとの触れあいを通して自己理